

巻頭言

森林研究の生命線は現場にあり

- 樹木根の調査・研究に名を借りて、ひと言 -

研究管理官 佐々 朋幸



過日、森林水動態に関する一つの数理モデルを紹介されました。もともと、森林や樹木の専門家でもない方が作成したモデルとしては、幹や枝葉など生理・生態的な既存観測データが多量に採用されており、なかなかの傑作と感心させられたものです。しかし、その中身をよく検討すると、根の分布域に関する条件設定が実態と著しくかけ離れて大きく、しかも、それだけの大きさでないとモデル自体も成立しなくなることが分かったのです。

ところで、当のモデル作成者に根の概形や水分吸収の役割など一通りの知識が無かった訳ではありません。きっと、一刻も早く目的のモデルを完成させたかったため、根の正確なデータ収集は後回しにして、目の前の樹体地上部データだけで地上部解析に都合良くパラメータを設定してしまったのでしょう。しかし、いざ出来上がったモデルで試算してみると、地上部だけでは説明のつかない値が続出。結果として、過去に直視体験が無かった根の分布域を異常なほど拡げることによって、難局打開を図ったものと推察されます。

この一例は、「科学するに当っては脳裏に浮かぶまま憶測を取り上げてはならない。たとえ仮説と言えども、自然を十分注意深く観察した上で立てなければならない」という教訓を伝えるものでしょう。どこの世界でも同じと思いますが、一度見解が成立してしまつと、それに代わる見解を出すのが非常に困難となってしまいます。目新しさ故に殆ど疑問も持たれず受け入れられるような学説の中には特別な役割を果たさないどころか、かえってそれを払拭するため後進達に無駄な時間と労力を強いることさえあるのです。

振り返って、森林研究を本業とする私達でも同様なことは無いでしょうか。森林や樹木の研究成果が続々と生み出される中で、根の実態や機能に迫る研究は果たしてどれだけあるとお思いですか。極めて少ないと言わざるを得ません。その原因は、根の存在は直に人の視覚に訴えることがなく研究意欲を駆り立てない、また調査が極めて困難な割に目に見える成果を得難いからでしょう。だからと言って、根を無視して森林を研究することはできない筈ですし、多くの場合は迷いつつも過去の調査例に頼っているのが実情のようです。

多くの既存情報や調査例の中には将来長く尊重されるべきものが沢山あります。しかし、それらはあくまで過去の世界であり、その枠内だけで事を論じていては更なる未知の世界を明らかにすることは出来ません。何事に対しても、いきなり結論を引き出せるほど超頭脳明晰な人はこの世にいないわけですから、私達には調査や実験を重ねて事を成就するまで弛まぬ努力が求められてきます。ところが残念なことに、最近はこのこうした地道な繰り返しを嫌い、調査や実験の代わりとなる近道を早く見つけたがる傾向が広まっているように映ってなりません。こうした状況下であって、真に輝かしい成果が生まれるか否かは、一見些細で面白くもなさそうな、そして面倒臭くて誰も嫌がる3K(きつい、汚い、危険)が付きまとう...そうした現場の仕事を大切にすることがどうかにかかっているのです。

[\[巻頭言\]](#) [\[解説シリーズ\]](#) [\[報告\]](#)

[\[所報トップページへ\]](#)